

Sharon Pollock の歴史劇とドラマトゥルギー

南 良 成

Sharon Pollock's Historical Drama and Dramaturgy

Yoshinari Minami

The present paper aims at clarifying the characteristics of the dramaturgy of Sharon Pollock, who is one of the leading English playwrights in Canada, by examining some of her historical plays. Special emphasis is placed on a comparative analysis of Pollock's *The Komagata Maru Incident*, which deals with the issues of Asian Canadian immigrants, and Kinoshita's *A Japanese Called Otto*, which treats an espionage case. The paper touches upon the historical backgrounds of both plays and the playwrights' intended themes, and also indicates the similarity between Pollock's dramaturgy and that of Kinoshita. Through this emphasis, it is demonstrated that Pollock is a very sincere playwright who faces Canadian history squarely and always tries to explore issues surrounding Canadian national identity.

Key words

Sharon Pollock, Lizzie Borden, Blood Relations, the Komagata Maru, Walsh, Fair Liberty's Call

I

1980年代になって Sharon Pollock の劇作品がカナダ演劇界で脚光を浴び、Pollock 自身もカナダ演劇の課題や劇作法について多くを様々な場で語りはじめ、今日ではカナダ演劇を考える上で看過できない劇作家となっている。1994年11月、Pollock は日本国際交流基金の招聘で来日し、在日カナダ大使館において講演をおこなった。その折の講演の中で、彼女はカナダ演劇界の現況を伝えると同時に、演劇界内側からの現代カナダ演劇への問題意識を吐露した。彼女は、一方でアメリカ商業演劇やカナダ経済構造変化の悪影響を指摘しカナダ演劇の将来性に懸念を表明しながらも、一方でカナダ社会の少数派民族の間から新しい演劇の息吹が見られると希望の見解を述べた⁽¹⁾。確かにカナダにおいて英語系演劇の昨今の様子は Pollock が愁うような概況にあるが Pollock 自身の劇作活動を見る限り、また、彼女の作品を評価し舞台化しようとする演劇関係者がいて、その上演を楽しみにして来る観客がいる限り、英語系カナダ演劇の健在を感受しうるし、また、期待も持ち得るように思う。

聴講した日本人の間で、特に東京の演劇人の中で、Pollock の来日講演を契機に彼女の劇作品に対して関心が高まった。筆者も Pollock 講演に啓発された者の一人であるが、Pollock 作品を数点読んで強く感じたことは Pollock と木下順二のドラマトゥルギー⁽²⁾の類似性である。本稿は、Pollock の歴史劇、特に戯曲 *The Komagata Maru Incident* を中心に論じ、Pollock のドラマトゥルギーを木下順二の演劇理念との比較の下に分析的考察を試みるものである。

II

Sharon Pollock は、1936年、ニューブランズウィック州のフレデリクトンで外科医である父 Everett Chalmers と母 Mary Sharon Chalmers の間に生まれた。長じてニューブランズウィック大学に入学したが、トロントに住む保険ブローカー Ross Pollock と結婚のため、1954年、中途退学した。しかし1960年代の初頭、夫と別居。離婚後5人の子供を連れて彼女はフレデリクトンに戻り、The Playhouse や Theatre New Brunswick で女優業をはじめ様々な劇場関係の仕事についた。1966年に俳優の Michael Ball と再婚してカルガリーに居を移してからは劇団 The Prairie Players の女優として活動し、Ann Jellicoe 作 *The Knack* の公演に出演した時には Dominion Drama Festival⁽³⁾ 最優秀女優賞を受けた。やがて彼女は劇作に関心を移し、1971年の処女作 *A Compulsory Option* でアルバーター劇作コンテストに入賞した。パラノイアを扱ったブラックユーモア風のこの作品は、翌年、バンクーバーの New Play Centre で初演されている。次作品 *Walsh* は1972年から73年にかけて執筆され、Calgary Theatre で1973年に初演された後、翌年には the Stratford Festival 第三劇場で上演された。これを契機に Sharon Pollock の名は全国的に知られ、劇作家として注目を引くようになった。その後、彼女はバンクーバーに移住し、舞台劇、放送劇、児童劇などの作品を次々と発表し、*Blood Relations* という作品ではカナダ総督賞を受賞している。1988年、彼女はカルガリーに戻り、現在、ここを基点に、劇作、舞台監督、俳優として、幅広い活動をしている。

Sharon Pollock の劇作家としての資質は、カナダ総督賞を与えられた作品 *Blood Relations* に如実に発揮されている。この作品は1892年にアメリカのマサチューセッツ州フォールリバーという町で実際に起きた殺人事件を題材に創案されたものである。事件は Lizzie Borden 猟奇殺人事件として広く報道され、当時、カナダを含め北米中の町々で人々を震撼させた。それは、Lizzie Borden という女性が実父 Andrew Borden と継母 Abby を共に斧で惨殺したという容疑で逮捕・起訴されたことが新聞に報道されたことに端を発し、Andrew Borden が町の資産家であったことや Lizzie と Abby が極めて不仲であったことなどが話題にされ、実に様々な憶測が飛び交った。しかし、裁判においては、当初 Lizzie のアリバイ証言には少なからず矛盾が露呈されたにもかかわらず、証拠不十分ということで判決は無罪であった。この事件は、北米社会では後々までも語り草となり、童謡にまで歌われ続けている⁽⁴⁾。

劇作家 Pollock は、Lizzie Borden 事件を題材にして *Blood Relations* を書いたが、劇中の主人公 Lizzie が殺人を犯したかどうかの点に関しては劇の最後まで不明である。実際の裁判で歴然と無罪になった人物を確たる証拠資料も無いままに自作品の中で犯罪者としてあからさまに描くことは問題があるだろう。実は、作者の意図は劇中で Lizzie Borden の犯罪行為の有無を検証することではなく、別の象徴的な意味を追求することにあった。Lizzie は父娘の心理的執着を一方で示しながら、もう一方で父が固執するビクトリア朝的モラル、つまり、女性は家庭に留まり淑女としての徳性を養うことが何よりも肝要とするような因習を嫌い、家庭の枠にとらわれない自由な世界を希求している。*Blood Relations* という作品は、19世紀末の家父長制を核とした保守的社会的慣習と個人の自立欲求の間で分裂した自己に閉塞されてしまう女性の悲劇を描いている。それは、社会と個人、そしてまた、分裂した自己と自己の対立を描くがゆえにドラマ性を成立させていると言える。

Pollock は *Blood Relations* のドラマ性を高めるために、現代劇で用いられる劇作技法をいくつか試みている。例えば、Miss Lizzie と The Actress のロールプレイ⁽⁵⁾、作者自身が言う“dream thesis”に基づく劇中劇の展開⁽⁶⁾、フラッシュバック、決定的行動前を舞台で見せ、且つ、決定的行動自体

は舞台裏設定というサスペンス手法などを駆使し、ドラマティック効果を演出している。確かにこの作品のサスペンスドラマの要素は観客の興味をひきつける重要な要素となっていることは否定できない。Pollock 自身が長らく舞台人として活動してきた経験が教えた劇作技法と言えるかもしれない。

III

Blood Relations が実際に起こった事件を題材にしていることは以上述べた通りだが、Pollock の作風全体を通じて言えることは、実際に起こった事件や史実から創案を得てドラマ化する傾向が強いということであろう。例えば、1974年発表の *Walsh* はスー族の一部がアメリカ・モンタナ州からカナダの南サスカチュワン州内へ移動した問題を、カナダ側の政治的対応を文脈に織り込んでドラマ化したものである。1887年6月25日、リトルビッグホーンの戦闘においてシッティング・ブルとクレイジー・ホースに率いられたスー族、シャイアン族などが結集し、カスター中佐率いる第7騎兵隊を全滅させた史実はよく知られているが、このドラマは、その後、連邦軍の猛烈な反撃によってインディアン側が敗北して、シッティング・ブルのスー族がカナダへ亡命して定住を求める時点からの物語である。当時のカナダ北西部騎馬警察の指揮官であったウォルシュ少佐がドラマの主人公で、スー族の扱いをめぐる組織への忠誠心ゆえに弱者に対して冷徹に法執行をおこなおうとする人物が、やがて政府の姿勢に疑問を抱くようになっていく姿が描かれている。戯曲の題も *Walsh* となっている。シッティング・ブルとウォルシュ少佐の談判の中に、カナダ政府とアメリカ合衆国政府の微妙な関係が事件の歴史的背景にあることが観客に伝達される台詞が聞かれ、Pollock のカナダ人としての歴史意識が強く出ている作品となっている。

Walsh と同様に歴史的事件を扱いながら、単に出来事の詳細を伝達することを主眼とした doc-drama⁷⁾(記録劇)とは異なるパースペクティブを持った *The Komagata Maru Incident* は注目に値する作品である。作品の歴史的背景となっているのは、第1次大戦の頃のバンクーバーで起こった一事件である。1914年5月23日、日本の蒸気船「駒形丸」が376名の移民者を東インドからカナダのバンクーバー港へ運んできた。が、当時のカナダの人種差別的移民政策によって24名を除いた352名が入国を拒否され、同年7月23日、海軍戦艦 *Rainbow* の威嚇を受けて駒形丸はついに港から追い出された。その後、駒形丸は香港経由でインドへの帰路に着いた。

Pollock はこの事件を素材に戯曲 *The Komagata Maru Incident* を1975年に上梓し、この作品は1976年1月に the Vancouver Playhouse 劇場で初演されている。この劇は、すべての舞台上のアクションと場面転換が俳優のポジションとライティングの効果的使用によって進行し、一幕物の長編劇となっている。劇中のドラマ的要素としては、まず、数人の登場人物間の激しい対立がある。彼らは駒形丸の乗船者達の処遇をめぐる、時には詰りあい、時には高圧的に振る舞い、あるいは時には諜報活動をおこない、苛烈に敵対する。移民審査官の William Hopkinson は権力を行使して駒形丸乗船者達の上陸を拒否しようとするが、大半の乗船者はかつてイギリス軍に従軍しており大英帝国の臣民でもあったので、Hopkinson が既存移民法を盾に彼らの入国を即座に拒否することは難しかった。乗船者達は、一致団結して自分達の入国移民権の正当性を主張し法廷闘争を起こそうとする。Hopkinson は、部下の George がドイツ系カナダ人でアジア人に対して人種的偏見を強く抱いていることを知って、彼を利用し乗船者達の仲間割れを画策する。また Hopkinson は、船内の食料が底をつきつつある窮地に乗じて、食料供与を引き換え条件に提示し、彼らに移民を諦め

て自発的にバンクーバーから退去するよう説伏しようとする。側にいた Hopkinson の愛人 Evy は、彼女自身がバンクーバーの街の娼婦という社会的弱者であるがゆえに、Hopkinson の移民希望者に対する冷酷な態度を批判する。また彼女は Hopkinson の弱点をつき、彼自身が有色人種の血が混じっているのに肌の色を理由にアジアからの移民希望者を追い払う資格はないと難詰する。

HOPKINSON *catches* EVY; *she speaks softly.*

EVY : And Billy's mother's brown.

HOPKINSON *slaps* EVY; *she speaks louder.*

EVY : And Billy's mother's brown!

HOPKINSON *slaps* EVY; *she speaks louder.*

And Billy's mother's brown.

HOPKINSON *throws* EVY *down, kneels and shakes her.*

HOPKINSON : Don't say that. Don't say that! I'll kill you if
you say that to me ! (*slowing down his attack on her*)
Evy, don't say that. Please don't say
That..(*stopping*) I...I love you, Evy, don't say
that to me...

EVY *reaches out and draws his head to her.*

EVY : Oh...oh...poor, poor, Billy⁽⁸⁾.

彼には迷いが生じるが、T. S. という人物が Hopkinson の優柔不断さを揶揄し、軍艦を派遣して恫喝してでも追い払えと、命じる。T. S. は劇中ずっとイニシャルのまま登場するが、作者は T. S. に複数の役割を持たせるために敢えてイニシャルでの登場人物を設定したものと考えられる。T. S. は Hopkinson に命令を下す上司という役割であるが、同時に、それは当時のカナダ政府、あるいは、プリティッシュコロンビア州当局の公式姿勢を表象しており、それは、あくまで東インドからのアジア系移民者達の入国を拒否し排斥することに他ならなかった。次の彼の台詞が有色人種排斥の考えを端的にあらわしている。

T. S. : Ladies and gentlemen! It walks!. It talks. It reproduces! It provides cheap labour for your factories, and a market for your goods! All this, plus a handy scapegoat! Who's responsible for unemployment! The coloured immigrant! Who brings about a drop in take-home pay? The coloured immigrant! Who is it creates slum housing, racial tension, high interest rates, and violence in our streets? The coloured immigrant! Can we afford to be without it? I say "No!" It makes good sense to keep a few around - when the dogs begin to bay, throw them a coloured immigrant! It may sound simple, but it works. Remember though - the operative word's "a few" - For reference, see the Red, the White, the Blue and Green Paper on Immigration, whatever year you fancy !⁽⁹⁾

追い詰められた乗船者達の間で仲間割れや暴動の兆しが現れ始め、事態が錯綜する中、Mew Singh という人物に Hopkinson が銃で撃たれ倒れる。その後、Hopkinson を殺害した犯人が捕らえられ絞首刑になったと伝えられ、T. S. が観客に向かって一礼したところで幕は下りる。

この劇で扱われているドラマ的要素として明白なことは、東インドから来た人々の移民許可要求とカナダ政府の人種差別政策との対立である。作者 Pollock は、バンクーバーのカナダ移民局事務所が彼らの入国を拒否したのはカナダ政府の公式政策に従ったもので、それは20世紀初頭のカナダ社会が孕んでいた人種差別の風潮を反映したものだと考えている。彼女は作品の序文において、“As a Canadian, I feel that much of our history has been misrepresented and even hidden from us. Until we recognize our past, we cannot change our future⁽¹⁰⁾”。と述べているが、この言葉は、カナダの人種差別政策という過去の罪過を看過してはならないし、また歴史的事実を直視して理解しない限りカナダの未来は危うくもなるだろう、という Pollock の歴史意識が反映していると言えるだろう。

カナダ人は過去の駒形丸事件のような史実を通して人種差別問題の根源を直視すべきだ、と Pollock が強調していることは間違いないが、彼女の劇作品は単に歴史的事象を記録することや人種差別反対の政治キャンペーン小冊子の役目を果たすものではない。*The Komagata Maru Incident* の本質は、個人としての人間と強大な時流の力との間の厳しい拮抗を描いているドラマである。登場人物の一人でシーク教徒の女性に対して、作家は個人名を与えず、ただ WOMAN として語らせる。このシーク教徒女性がカナダ政府の人種差別を受けた駒形丸船上のシーク教徒移民を代表すると同時に差別的処遇に苦しめられている弱者全般を象徴していることを、作者は示唆しようとしたのではないだろうか。歴史的視野を広げて考慮してみれば、Hopkinson でさえ、結局、犠牲者なのである。何故ならば、彼も時勢を反映した政策の遂行者として個人的には身動きのとれない状態のまま殺害されてしまったのだから。

Pollock はドラマの中核として、人間個人の生きる意思と歴史的出来事に付随する時流の圧力との緊張関係を重視している。歴史の潮流に無自覚な人間、そして自立した責任行動の意志を欠如した人間にとっては時代の奔流とのドラマティックな対峙経験は生じないだろう。Hopkinson を殺害した Mewa Singh の行動の是非は、歴史的事件の発生した激流の最中にある者、あるいは時代風潮を客観的に見る眼を持たない者にとっては、判断は容易ではないかもしれない。*The Komagata Maru Incident* の最終場面において WOMAN が断頭台の露と消えていった Mewa Singh の言葉を伝えている。

I am a gentle person, but gentle people must act when injustice engulfs them. Let God judge my actions for he sees the right and the wrong. I offer my neck to the rope as a child opens his arms to his mother⁽¹¹⁾.

IV

Pollock が歴史的背景を組み込んでドラマを構築しようとした点は、戦後の日本で劇作家として活躍してきた木下順二の演劇理念と類似しているように思われる。木下は『ドラマが成り立つとき』の中で、「……なにかおもしろい事件や、単なる力と力の対立を手際よく描いたものがドラマなのではない。人間が如何ともしがたい力と、全力を尽くしてどう人間が対峙するか、そこに漲る緊張感、それがドラマの根本なのだと思います。」⁽¹²⁾と述べている。また

ドラマにおける葛藤は、よく A と B との対立という形でいわれるが、私は、作者と何ものかの対立がドラマだと思う。作者との対立物は、強ければ強いほどいいわけで、つまり「超人的」なものが、最も強い対立物として、ギリシャ以来今日まで、常にドラマのモチーフ

イションであった。ギリシャ悲劇では、それは“運命”であり、イプセンの場合は“社会”、シェイクスピアから17～18世紀のフランス古典劇にかけては、つきつめていえば、それは“絶対主義”だと云えるだろうし、18～19世紀になって、“歴史”が超人間的なものとしてとらえられるようになった。私自身も、超人間的なものを、“歴史”という言葉でよぶ¹³⁾。

とも語っている。ドラマの本質的要素は不可避の対立関係にあると見る考えは木下独自のものというわけではないが、木下は超人的な力が個人としての人間に対峙して立ち現れる状況が主要なドラマ的要素だと考えているのである。

ではここで木下の作品『オットーと呼ばれる日本人』を例に著者のドラマトゥルギーを具体的に考察してみよう。この劇は、1930年代初期から40年代初頭にかけて、オットーと呼ばれていた一人の日本人が国際共産主義組織の諜報活動家 Johnson という人物と共謀してスパイ行為を働いた物語を扱っている。オットーは上海と東京の間を何度も往復し日本の国家機密を国際共産主義組織へ漏洩していたが、ついに発覚して逮捕され、スパイ行為による大逆罪で有罪判決を受け処刑されていく。この劇が、実際に日本で発生した、通称「ゾルゲ事件」として知られているスパイ事件を詳しく調査して執筆された経緯は、次の木下の言葉に示されている。

「オットー」というのは、ゾルゲ国際スパイ事件として一般には知られているあの事件の中で、尾崎秀実に、コミンテルン諜報機関が与えた偽名だと、検察側の資料は伝えている。実在の尾崎の実際の行動を、そのまま私が描こうとしたわけではない。が、「オットー」という外国名で呼ばれ、せい一杯の生命をかつて生き切って、非国民と呼ばれつつ刑死しなければならなかった一人の「日本人」の行動が持った本当の意味は何であったのか¹⁴⁾。

木下の作劇意図は、時代の趨勢に抗して生きること、当時の軍国化していく日本社会の中で思想家として如何に自立して行動できるかということ、を追求して考えることであった。1930年代から40年代初頭に至る時代は、日本の歴史上の転換期にあり、日本は太平洋戦争への道を進み始めた。日本の軍国主義化の情勢に抵抗することが正義だと信じて、そして日本国民を救い世界平和を守るために、ドラマの主人公はスパイ活動に参画する。主人公オットーの直面する問題は劇作家・木下が深く関心を持つ主題であった。木下の劇作のテーマは、常に、歴史の潮流の最中で人は如何にして流されることなく自立して生きうるかを問うことなのである。

V

以上のように見てくると、Sharon Pollock と木下順二のドラマトゥルギーにはいくつかの共通点がみられる。第一に、両劇作家のどの歴史劇作品も、過去の歴史的出来事をドラマの土台に利用して事実の詳細を物語として伝える単なる記録劇の限界に留まっていないということである。Pollock も木下も登場人物を歴史上の実在人物をモデルとしながらも、彼らの懊悩や内面の葛藤に眼を向けることで、作品を時代の乱流に生きる人間像をいきいきと描くドラマに仕上げている。第二に、両劇作家は、フラッシュバックの技法を巧みに取り入れ、いわば、複合時間操作を劇中に施している。過去、現在、未来が登場人物の意識の在所と共に流動や交錯する様は、台詞に加えて舞台位置や照明の工夫で達成されるようにと書きで指示されている。これらの技法は登場人物

の内面の世界を表現する上で貢献していると言えよう。また、舞台という限られた空間において時空を歴史劇の展開にふさわしい構成をとるための至当な技法でもある。第三に、両劇作家は劇作品のドラマ的要素として対立関係を重要視するものであるが、それは思想や感情上での諍いというよりも、個人としての人間と歴史の潮流という超人的な力との対立に重点を置いているのである。

確かに Pollock にも木下にも、過去の歴史を直視しているか、という問題意識は強い。また一個人が時代の潮流に迎合すべきか抵抗すべきかという行動の選択を迫られた状況の中に最大の劇的要素を看取する。木下は「願望を持ったゆえに願望を達成し得、しかし同時にその願望のゆえに願望を達成し得ないという矛盾、それがドラマの本質なのであり、そして歴史というものは、そのような矛盾の積み重ねなのではないか⁽¹⁵⁾」と述べ、ドラマと歴史のアナロジーを見ている。Pollock も同様の演劇理念を共有していると言ってよい。一般的には木下順二は『夕鶴』を書いた民話劇作家としてよく知られているが、実際は、上述したようなドラマ観・歴史認識を持つ劇作家であるがゆえに『オットーと呼ばれる日本人』の他にも多くの歴史劇を世に送っている。『山脈』『風浪』『沖縄』『神と人のあいだ』『子午線の祀り』などがある。これらの戯曲作品の中にも一貫して木下のドラマトゥルギーと歴史観が反映されているが、この点に関しては稿を改めて論じることにしたい。

本稿の主題である Sharon Pollock のドラマトゥルギーと歴史劇を考察する上で重要な作品としては、*The Komagata Maru Incident, Walsh* の他に *Fair Liberty's Call* を挙げねばならないだろう。この作品は、1785年前後のニューブランズウィックが舞台となっている。アメリカ合衆国の独立革命軍勝利の後、アメリカにいたロイヤリスト（王党派）がカナダのニューブランズウィック州へ移住してくる苦難の歴史が背景にある。その当時、約5万人近くの人々がアメリカからカナダへの移住を余儀なくされたわけだが、劇中の Roberts 一家もロイヤリストの立場をとっていたため革命戦争後ボストンに居れなくなり、カナダ側への移動を決意する。一家はこれまでの戦場で長男が戦死し、次男は自殺してしまった。父母と二人の娘と黒人奴隷の5人は苦難の末ようやくニューブランズウィックに到達し、ここを永住の地とする決心をする。このドラマの主人公は一人と言うよりも、登場人物一人一人がすべて主人公と言ってよい構成になっている。それぞれが、歴史の激動の最中、自らの運命と対峙し、新天地で次第とカナダ国民意識を芽生えさせていく物語である。

Fair Liberty's Call という作品は、アメリカ独立革命戦争後のロイヤリスト達のカナダ移住という史実を題材に、カナダ国民意識の問題をテーマとして扱っている。また、このテーマはすべてのカナダ人が常に共有するテーマでもある。この観点からすれば、

This play is less about the past than it is about the present. Canada, after all, is a country built on immigration and characterized by a very uneasy relationship with the United States⁽¹⁶⁾.

という論評も正鵠を得ている。

現在のカナダは多元文化主義を国是として掲げ、移民者が多種多様な文化混在状況の社会で、民族対立の激化や紛争が発生することもなく比較的平穩に共存して暮らしている。しかし、過去を振り返れば、様々な対立抗争事件が起こっているし、また、過酷な人種差別も行われてきた。例えば、第二次大戦中に日系カナダ移民が受けた迫害は、今日では明らかに人種差別政策に基づいていたことが認知されている⁽¹⁷⁾。劇作家 Pollock はそうしたカナダの歴史を直視するがゆえに、

また、ドラマと歴史のアナロジーを洞察するがゆえに、歴史劇を書きつづけているのだろう。Hopkinson の個人的ディレンマは、カナダ人すべてが直面しうるディレンマであり、いわば、カナダ国民にとっての寓意とも言えるのではないだろうか。

注

- (1) 1994年11月22日に在日カナダ大使館でおこなわれた Sharon Pollock の講演内容は出版物としては残っていないが、筆者が備忘録にもとづきまとめた概要を次の論文の一部に収録した。
拙稿「現代カナダ演劇の諸問題」『阪南論集 人文・自然科学編』第36巻3号 2001年1月 51-60頁
- (2) ドラマトゥルギーは、「作劇術」とか「劇作法」と訳されることが多いが、これらの訳語は誤解を招きやすい。ドラマトゥルギーは単に技術論上の概念ではなくて、ドラマ理念と戯曲構成技法が統合化される過程である。作家が戯曲を書くときに必要とされるのは、技術論に先立って、まず作家が何をドラマティックと考え、何をドラマの主要素として把握するか、という理念であろう。
- (3) Dominion Drama Festival は1932年10月29日に演劇芸術振興に熱心な人たちが総督、首相ならびに政府要人と会話し、会談の結果創設された演劇祭で毎年4月に開催される。最初のドミニオン演劇祭は1933年4月23日に開かれた。現在も続いているこの演劇祭は、国立の要素が強いので、カナダにおいて最も評価の高い演劇芸術活動である。
- (4) マザー・グース童謡として歌われている一節は次のようになっている。
“Lizzie Borden took an axe / And gave her mother forty whacks / When she saw what she had done / She gave her father forty-one.”
そしてこの歌声は *Blood Relations* の劇中第2幕で、背景から聞こえてくる。
- (5) 劇の中で Miss Lizzie がメイド Bridget の役をし、Actress が Miss Lizzie の役割を務める仕掛けが組み込まれている。このロールプレイの技法に関しては、Stone-Blackburn の論考に詳しい。
- (6) Sharon Pollock, *Blood Relations*, p. 13 .
“The time proper is late Sunday afternoon and evening, late fall, in Fall River ,1902 ; the year of the 'dream thesis', if one might call it that, is 1892 .”
- (7) カナダ演劇のドキュメントドラマに関しては Robert Nunn, “Performing Fact : Canadian Documentary Theatre”を参照。
- (8) Sharon Pollock, *The Komagata Maru Incident*, pp 269-270 .
- (9) *Ibid.*, p 258 .
- (10) *Ibid.*, p 226 .
- (11) *Ibid.*, p 286 .
- (12) 木下順二 『ドラマが成り立つとき』, 岩波書店 ,1981年, pp .14 .
- (13) 木下順二 『木下順二評論集 5』, 未来社 ,1974年, pp 65-66 .
- (14) 木下順二 『木下順二評論集 7』, 未来社 ,1976年, pp 265 .
- (15) 同上, pp 60-61 .
- (16) Sherrill Grace, “Imagining CANADA: Sharon Pollock’s *Walsh and Fair Liberty’s Call*,” *Performing National Identities*, Vancouver: Talonbooks 2003 p 59 .
- (17) 日系カナダ移民の戦後補償に関して多大な貢献をした Roy Miki の著書 *Justice In Our Time* を参照。

《参考文献》

- Bassai, Diane. “Women Dramatists: Sharon Pollock and Judith Thompson,” *Post-Colonial English Drama: Commonwealth Drama Since 1960* . London: Macmillan ,1992 97-117 .
- Gilbert, Reid. “Sharon Pollock,” *Profiles in Canadian Literature* 6 . Toronto: Dundurn ,1986 ,113-120 .

- Gilbert, S.R. "Sharon Pollock," *Contemporary Dramatists* 3rd ed. London: Macmillan, 1982, 642-645.
- Grace, Sherrill and Gabriele Helms. "Documenting Racism: Sharon Pollock's The Komagata Maru Incident," *Painting the Maple: Essays on Race, Gender, and the Construction of Canada*. Vancouver: UBC Press, 1998, 85-99.
- Grace, Sherrill. "Imagining CANADA: Sharon Pollock's Walsh and Fair Liberty's Call," *Performing National Identities*. Vancouver: Talonbooks, 2003, 51-69.
- Johnston, Hugh. *The Voyage of the Komagata Maru: The Sikh Challenge to Canada's Colour Bar*. Vancouver: UBC Press, 1989.
- 木下順二 「オットーと呼ばれる日本人」『木下順二作品集』未来社, 1971, 5-145.
- 木下順二 『木下順二評論集5』未来社, 1974.
- 木下順二 『木下順二評論集7』未来社, 1976.
- 木下順二 『ドラマの世界』(中公文庫)中央公論, 1976.
- 木下順二 「沖縄」『木下順二作品集』未来社, 1978, 97-197.
- 木下順二 『ドラマが成り立つとき』岩波書店, 1981.
- 木下順二 『議論のこしたこと』福武書店, 1986.
- 木下順二 『劇的とは』(岩波新書)岩波書店, 1995.
- 木下順二 『子午線の祭り・沖縄・他一篇』(岩波文庫)岩波書店, 1999.
- Knowles, Richard Paul. "Replacing History: Canadian Historiographic Metadrama," *Dalhousie Review* 67, 1987, 229-243.
- McKague, Ormond. *Racism in Canada*. Saskatoon: Fifth House Publishers, 1991.
- Miki, Roy & Cassandra Kobayashi. *Justice In Our Time*. Vancouver: Talonbooks, 1991.
- 南 良成 「カナダ現代劇作家とドラマトゥルギーの問題」『カナダ研究の諸問題』日本カナダ学会(編), 1987, 213-225.
- Minami, Yoshinari. "Canadian Plays on the Japanese Stage," *Performing National Identities*. Vancouver: Talonbooks, 2003, 181-197.
- 宮岸泰治 『ドラマと歴史の対話』影書房, 1985.
- Nothof, Anne. "Crossing borders: Sharon Pollock's Revisitation of Canadian Frontiers," *Modern Drama* 34-4, 1995, 475-487.
- Nothof, Anne, ed. *Sharon Pollock: Essays on her Work*. Toronto: Guernica, 2001.
- Nunn, Robert. "Performing Fact: Canadian Documentary Theatre," *Canadian Literature* 103. Vancouver: UBC Press, 1984, 51-62.
- Nunn, Robert. "Sharon Pollock's Plays," *Theatre History in Canada* 5-1. 1984, 72-83.
- Page, Malcom. "Sharon Pollock: Committed Playwright," *Canadian Drama* 5-2. Guelph: University of Guelph, 1979, 104-111.
- Paget, Derek. *True Stories?: Documentary drama on radio, screen and stage*. Manchester: Manchester University Press, 1990.
- Pollock, Sharon. "The Komagata Maru Incident," *Six Canadian Plays*. Ed. Tony Hamill, Toronto: Playwrights Canada Press, 1922, 223-286.
- Pollock, Sharon. *Blood Relations and other plays*. Edmonton: NeWest Publishers, 1981, 11-70.
- Pollock, Sharon. "Generations," *Major Plays of the Canadian Theatre 1934-1984*. Toronto: Irwin Publishing, 1984, 604-655.
- Pollock, Sharon. "Whiskey Six Cadenza," *NeWest Plays by Women*. Edmonton: NeWest Publishers, 1987, 137-247.
- Pollock, Sharon. "Walsh," *Modern Canadian Plays*. Ed. Jerry Wasserman, Vancouver: Talonbooks, 1993, 237-271.
- Pollock, Sharon. "Doc," *Modern Canadian Plays II*. Ed. Jerry Wasserman, Vancouver: Talonbooks, 1994.
- Pollock, Sharon. *Fair Liberty's Call*. Toronto: Coach House Press, 1995.
- Rubin, Don. "Celebrating the Nation: History and the Canadian Theatre," *Canadian Theatre Review* (Spring 1982), 12-22.
- Radakoff, Judith and Rita Much. *Fair Play: 12 women speak*. Toronto: Simon & Pierre, 1990, 208-220.
- Stone-Blackburn, Susan. "Feminism and Metadrama: Role-laying in Blood Relations," *Canadian Drama* 15-2. Guelph: University of Guelph, 1989.
- 津上 忠 『歴史小説と歴史劇』(新日本新書)新日本出版社, 1982.
- 吉田禎男 『駒形丸事件』八ツ橋出版, 1936.
- Wallace, Robert, and Cynthia Zimmerman eds. *The Work: Conversations with English Canadian Playwrights*. Toronto: Coach

House Press ,1982 ,115-126 .

Zimmerman, Cynthia. *Playwriting Women: Female Voices in English Canada*. Toronto: Simon & Pierre ,1994 .